現地検証

宇土山砦は毛利高政の建てた修道院（礼拝堂）跡か？

五月一日、切支丹大名毛利高政が造ったと伝えられる修道院・礼拝堂跡を視察に行く。参加者は小野英治会長、真柴茂彦顧問、河野信夫副会長、神田事務局長、神田亀吉会員、吉水淼会員、五十川千代見会員、卜部辰美公民館館長と編集担当の私、吉田の九名である。

鶴見振興局前に集合し車に分乗、鶴見大字有明浦字宇土山、日本水産株式会社大分海洋研究センター前に到着した。

真柴顧問や公民館に勤める卜部辰美氏の説明では、

○この宇土崎にある宇土山には古い碑が建っている。

○山頂に石垣があり、県の調査では宇土山砦となっているが石垣で囲まれた土地が正方形の形をしており、上の段と下の段の境に段差がある。また上の段の所には登り道の跡がある。

○高政が宣教師に贈ったと言われている土地に形が似ている。

○場所が日野浦と広浦の中間にあたり、昔の旧道沿いにある。

○広浦に天主堂や礼拝堂があったとの話もあるが、広浦の上には何も無かったと言う。

このような事から一度現地を見て調査し、場合によっては地主の許可を得て掘り起こし等を行い、詳しく調べてみる必要があるのではと話していた。

「切支丹大名毛利高政が修道院を建てた。」「礼拝堂を寄進した。」との話は、佐伯市史や鶴見町史、佐伯郷土史後編（増村隆也著）に紹介されている。

『佐伯市史』には

・毛利高政はキリシタン大名と云われている。

・レオン・パジェスの日本切支丹宗門史に「慶長十一年エルナンド・デ・サン・ヨゼフが、佐伯城下に小さな修道院を建て毛利高政（伊勢守殿という大名）も〝一度は改宗したことのある背教者〟であったが、自費で天主

堂と大修道院を建てた」と記述されている。

・日本基督教史に「…慶長十一年の頃、再び改心して宣教師に好意を表し、其の領地に切支丹寺を建立したが…」とあり、高政の建てたという天主堂や大修道院の跡は不明で佐伯藩の旧記には高政のキリシタン信仰に関するものは全くない。

「鶴見町史」には

・レオン・パジェスの著書『日本切支丹宗門史』第八章「一六〇六年」の条によると「エルナンド・デ・サン・ヨゼフ師は当時豊後から佐伯の近くに行き、その城下にささやかな修道院を建て、聖ヨゼフの保護の下においた。伊勢守殿という大名は一度は改宗したことのある背教者で、彼は自費で天主堂ともう一つ更に大きな大修道院を建てた。神父は佐伯で大きな結果を収めてのち、日向に行きその城下縣(あがた)で働いていたと記述されている。

・「豊後切支丹資料所収年表」に「慶長十一年、臼杵から宣教師フェルナンド・デ・サン・ヨゼフは佐伯に行き聖堂を建立す。佐伯の領主毛利伊勢守高政はクリスチャンであった。」とあり、佐伯の聖堂の所在地については、「丹賀より広浦に至る海岸に寺屋敷という地名があり、それは慶長時代に建てられた教会の跡であろう」と記している。

※城下町縣(あがた)—現在の延岡市のこと。

○佐伯郷土史後編には

・「日本基督教史」等の記載によれば高政は真摯(しんし)な切支丹信者であった。日本基督教史には「毛利高政は豊後佐伯の城主にして洗礼を受けて以来十数年切支丹大名大友氏の故地に封を受け、基督教の為に盡(つく)す所多かりしが家康の睨視(げいし)に触れて其の信仰を維持する能(あた)わず、一旦は棄教を表明せしもさすがに恥ずる所ありけん。慶長十一年の頃再び改心して宣教師に好意を表し其の領地に切支丹寺を建立せしが、是ただ一時其の良心の煩悶(はんもん)を避けるの手段に過ぎざりしと見へ全く棄教し反対の態度を表するに至れり」と記載し、更に新井白石の藩翰譜(はんかんふ)にも高政は切支丹大名の内に記入されており又、高政は時々目養生(ようじょう)と称して中浦に赴き滞在していたといわれ、現在東中浦村丹賀に寺屋敷と呼ばれる所

があり、切支丹寺のあった所と言われている事を考えれば、高政は目養生と称して切支丹寺に参り秘密裡に信仰の生活をおくっていたものであろう。丹賀の切支丹寺のあったと呼ばれる所は東は断崖に沿い西は山の尾を負い南北は約七、八十間、東西廿間乃至十二、三間の平地で東方断崖に沿った所には石又は土で高さ二、五間乃至一間の土手を造り海上からは全く望み得ないように造られている。西中浦村地松浦の南、元越山の谷に綺麗な清水があり松ケ谷清水、又は大谷の清水と呼んでいる。高政はこの清水を好み屢々保養のため地松浦に行き、庄屋庄三郎の家に滞在し、長い時は数十日も保養し庄屋の庄三郎に次の高三石八升の地面を免租する書付を与えている。

其村其方手作之内高貳石八斗並屋敷方貳斗八升、
高三石八升令扶助幸永代全不可有相違者也
子ノ卯廿二日（慶長十七年）
伊勢守高政　印
松浦肝煎勝三郎え

又、享保五年地松浦庄三郎、同肝煎孫右衛門が藩に出した書類には、

「慶長年中に高政様御保養の為當浦松ケ谷の水にて御風呂召しなされ候、六月に御成遊ばされ翌六月迄閏月なりしか御座遊ばされ、其節庄三郎御家御本陣になされ候。而して三石八升高御免地申し付けられ、則ち御墨印頂戴し仕り候」と記している。

唯この書面だけでは高政が地松浦の清水が好きで長く滞在したことになるが、其の書面には常時取締の厳しかった切支丹信仰の生活があり、地松浦から程近い丹賀の切支丹寺に詣でていたのである、と記している。

このような事から、この宇土山が毛利高政の建てた「聖堂跡」ではないかと考えられている。

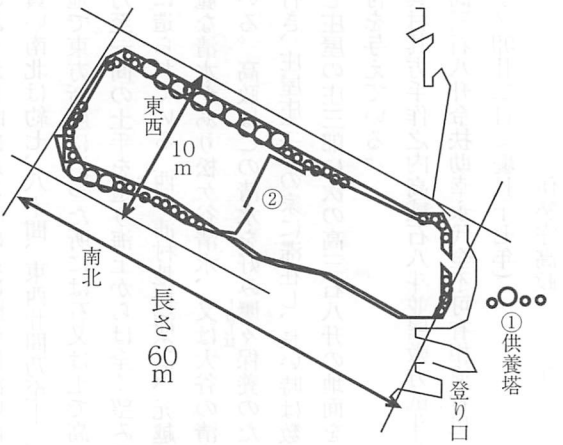
私たち九人は道無き道を登り峠の上に出た。ここは昔からの石垣に囲まれた土地があり、鶴見町の調査の段階で町内に多い「猪垣」の一つではとも考えられたが構造的に違っていたという。

その頂上は平坦で、灌木は茂っているがまわりに元の石垣が残されていて長さは南北六十m　東西十m程度の長方形の形をしている。

この平坦地の南側に四基の供養塔がある。一つは大き

く形は「元禄墓」の様に見える。後の二体は小さく残りの一体は倒れ土に半分埋もれていた。

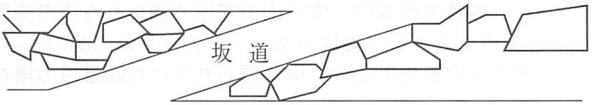
その付近を図示すると次のようになる。



入口付近の北側の石垣は高さ一メートル程の高さで残されており、その石垣の向こうには堀切が見られた。石垣に囲まれた中央部分には、高さ八十センチメートル程度の段差があり、登り道のような道があった。

《宇土山の山上の広場》

《中央付近の坂道と段差　図②の部分》



此の坂の部分は高さが一メートル弱で、幅が二メートル程あり斜面の登り道の様な部分が見られる。この写真の左手には、更に下に続く段差のある道が見られた。

《北側に残る石垣部分》

《供養塔　図①の部分》

四番目の塔（右端）

四基の供養塔（宇土山の石垣で囲まれた所の南側）
一番奥に大きな供養塔があり、その左手に二基の小さな供養塔
大きな供養塔の右に、倒れ埋もれていた四番目の塔があった

この大きな供養塔には
中央に「宝永四年（一七〇七）亥年
庚申塔為父母菩提　九月十一日」
左に「願主十二月　日野浦宗兵衛」
右に「行者　大嘉院　龍正院」とあった。
隣の小さな供養塔には中央に
①奉供養庚申石塔為四女安永也　寅八月吉日
②奉供養庚申石塔為二女安永也
と書かれており、年代は元禄十一年となっていた。

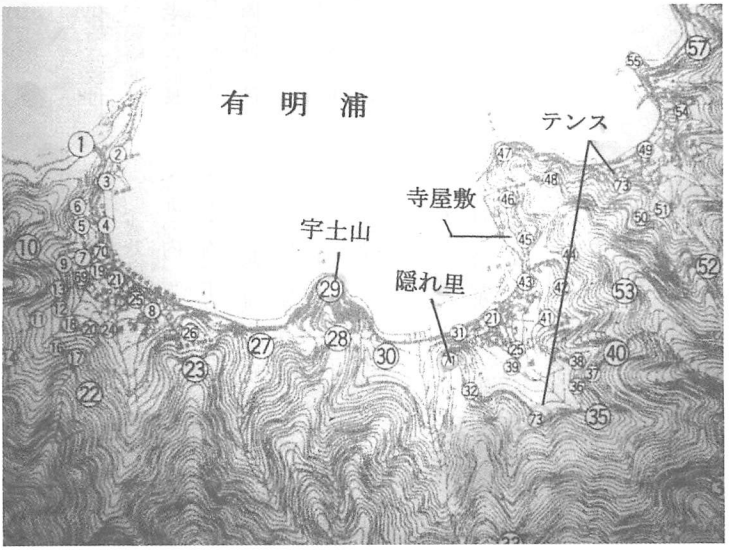
私たちは、この山上広場で今後どうするかを話し合い、後日、地主の許可を得て許可が降りれば掘り起こし、なんらかの遺物が出ないか調べてはとの意見となった。

この石垣で囲まれた地は、後日戴いた資料には「宇土山砦」と記されていた。

それによると、瀬戸内海に大きく開かれた佐伯湾の南岸、小さな二つの半島に挟まれた有明浦と呼ばれる湾の一番奥まったところの小さな岬上の通称「的場」と呼ばれる所に立地する。北側は海に面しており、旧道は岬上を横切るように通過していた。

歴史上、記録など無く詳細は不明である。しかし、峠の頂部にそこから引き込むように虎口を設けている事から、古道との関係は窺える。石積みが中世まで遡るものか確証はないが、曲輪の平面形態が佐賀関町一尺屋摺木（するぎ）砦との共通点もある。

なお毛利高政が眼病治療と称してこの地に礼拝堂を建てたという伝承もある。

この有明浦には宇土山の他に、東側の谷間に「隠れ里」「テンス」という字名（あざ）が残されている。「隠れ里」「テンス」は基督教を連想させる言葉に思える。

《宇土砦付近の地図》